

## 触媒花

神田光

おばあちゃんが最後に家の外に出歩いたのは、庭に咲く花を見に行った時だった。

歳を重ねるにつれて徐々に、電車での外出をひかえ、近所の友人宅に行くことをひかえ、屋外から出ることをひかえるようになっていったが、ある晴れた日の午後、ちよつと庭を散歩しようと声をかけると、行ってみようかということになった。

快晴、汗をかく程の気温ではなく、しゃくなげやつつじが咲く季節で、庭にはいろいろな花が植えられていて、二人で見て廻った。当時の自分には花を見るという趣向はなかったが、おばあちゃんは嬉しそうに眺めていた。

何を話したのかは全く記憶にないが、丸まった背中であつくりと歩を進め、一周できたことは鮮明に覚えている。まさか、これが最後の外出になるとは少しも脳裏を掠めなかった。

両親共働きだったため、学校から帰ると面倒をみてくれるのはおばあちゃんだった。

サッカークラブに行く前におやつと称し、大きなおにぎりをつくってもらったり、3段重ねのパンケーキだったり、揚げ物まで作っていただいたので、幼いながらさすがに油を使う料理の場合はハラハラして見守っていたものだ。

学校やクラブで嬉しいことがあると、一緒に嬉しそうにしてくれて、辛いことがあると、さりげなく、一瞬の輝きに全力で咲く花びらに手を添えるかのように、心に気持ちを寄せてくれる人だった。

家には近所のおばさんたちも入れ代わり立ち代わり大勢、話をしに遊びに来ていた。相談事や悩み事を持ち掛けられても、何でも受け入れてくれる大きな人だった。あの人たちも、おばあちゃんに話した時点で、問題は解決したかのようにスッキリとした表情でみなさんお帰りになっていた。

小学校の教師を務める祖父と、共働きの両親、孫との間で家族の中心を担う存在だった。穏やかで目立つことなく、何かあっても、そうですねえと笑って肯定的に捉える人だった。

自然への畏敬の念が強く、富士山を見ると両手を合わせてお祈りするよう  
な人だった。

花のことも好きで、よく愛でていたけれど、あの時に無理して重い腰を上  
げて外に出歩こうとしたのには別の理由があったように思える。

あれから三十年以上が経ち、相変わらず花を愛でる趣味は育んでないが、  
花を目にすると想い出す。